

② 独自の生態系

隠岐と本土の間の水深は最大 80m ほどしかなく、第四紀に繰返し発生した氷期と温暖期、特に最終氷期であるウルム氷期は、約 7 万年前から 1 万年前近くまで続き、最寒冷期の 2 万年前頃には海水位が 120m 程度低下したため、隠岐は、かなりの長期間に渡って半島となっていた。そのため本土から寒い地方の植物が轉移しやすい状況にあった。その後気温は上昇し始めたため、南と北の生物が混在する状況が生まれた。1 万年前頃には海水位の上昇により島となったため、隠岐には南北の植物が閉じ込められることとなり、現在は、独自の生態系を形成している過程にあるとされている。

キーワード: 杉の巨木群、ハマナス、ナゴラン、オキサンショウウオ、オキノウサギなど

③ 独自の文化を形成した人の営み

隠岐には古代より人が住み着き、地形・地質などを利用した独自の文化を築いてきた。その象徴として隠岐で産出される火山岩の一種である隠岐黒曜石がある、隠岐黒曜石は、その性質上薄く剥がれやすいため矢じりや包丁として利用されており、その歴史は旧石器時代約 3 万年前に遡り、本土と交易があったことが確認されている。

キーワード: 黒曜石、遠流の島、北前船、牧畑、多くの神社など

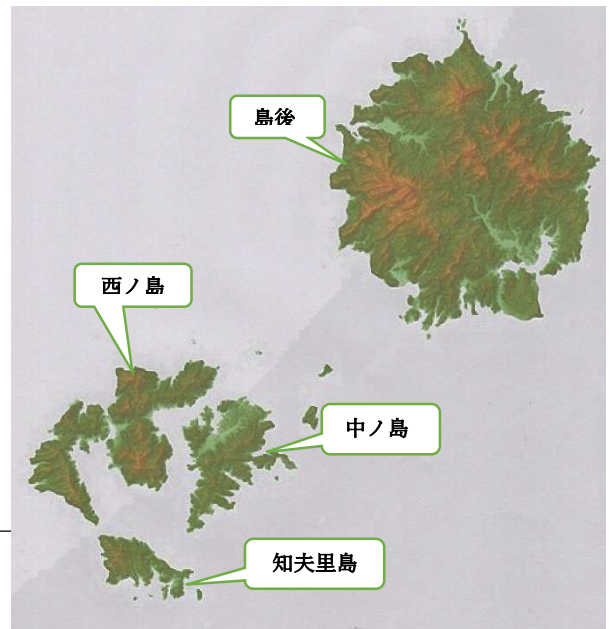


図-2 隠岐諸島全体図

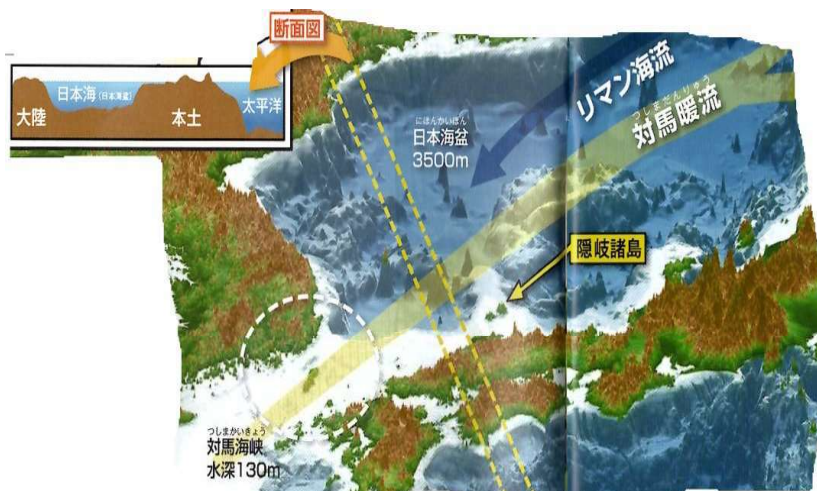


図-4 隠岐周辺の海流と日本海断面図

3) 島後の概要(図-2, 3 写真-1 参照)

島後は、隠岐諸島で最大の島であり、直径 20km 弱の円形を呈しており、その面積約 243 km²、人口約 13,000 人、周囲約 100km の島である。島の大部分は 500m 級の山地で、森林が 80% を占めているが、島の南東部には隠岐最大河川「八尾川(やびがわ)流域面積 44 km²」があり、下流部には平野部が形成され隠岐諸最大の市街地が存在している。最高峰は島南東部に位置する大満寺山 608m である。島に分布している代表的な岩石としては、基盤岩として「隠岐片麻岩」火山活動で噴出した「粗面岩」「アルカリ流紋岩」とされている。「粗面岩」は二酸化ケイ素を流紋岩よりやや少なく含み、アルカリ流紋岩はやや多く含み、ナトリウムやカリウム多く含んでいる。全体として流紋岩系で出来た島は 500 m 級の山々によるゴツゴツとした地形となっている。しかし、島の東部から南部は第四紀に噴出した玄武岩で形成された地域があり、その地形を利用して旧飛行場を拡張して 2,000m 級の滑走路を持つ飛行場が建設された。

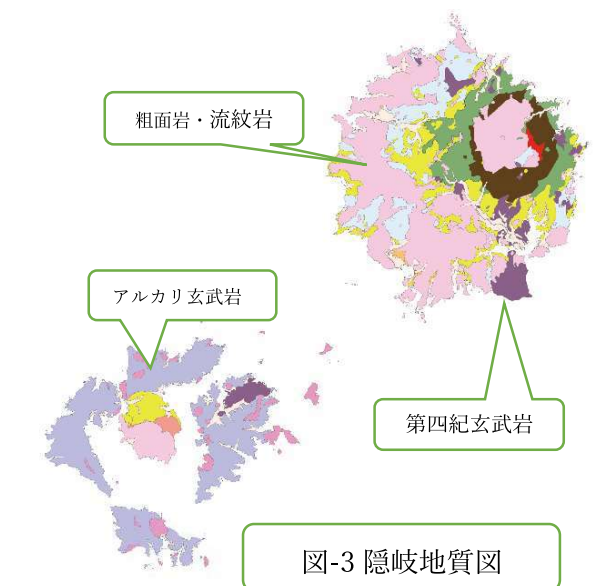


図-3 隠岐地質図



写真-1 隠岐世界ジオパーク空港